《芽ばえ賞》

「私の曽祖母のはなし」

有田市立文成中学校　1年
中西（なかにし）　紗知（さち）　さん

私の曽祖母は平成三十年一月二十七日に、めでたく百歳になった。今は老人ホームでお世話になっている。曽祖母は、五年程前に老人ホームに入所した。それまでも、デイサービスや短期入所をしたりしていた。

曽祖母は若い頃、股関節の手術をして足が不自由になったそうだ。それでも頑張り屋さんで、明るい性格。障害者とは思えない程だったそうだ。私も小さい頃、歌を歌ったり、本を読んでくれたり、また色々な話を聞かせてもらった。とても楽しかった。

私の母は曽祖母を「歩く生き字引」と言うほど、政治、経済、芸能まで何でも曽祖母に尋ねると教えてくれたそうだ。

そんな曽祖母も入所前色々な事があったのだ。脳梗塞になって、ヘリで運ばれたり、足が不自由なので、勝手口でこけて大腿骨を折って入院もした。

でもその度に、「いつまでも寝てたらあかん。はよ起きて歩く訓練せな寝たきりになる。」そう言って見事に復活してきた。

高齢で普通なら、そのまま寝たきりになってしまうんだと思う。若い私でも心が折れてしまうかもしれない。頑張り屋さんな性格が、家族を困らせたり、家族に負担をかけてはならないと言う、曽祖母なりの家族への心配りだったんだと思う。四世代同居のうちなので年齢幅もだいぶある。みんなが相手を思いやる気持ちをもって、またしんどい事も分け合いながら、我慢もしながら暮らしていくのだ。私が小さい頃は片杖。その後両杖になり、最後は歩行器を使って家の中を歩いた。

私の家には、手すりや、段差のスロープ、車いすや介護用のお風呂のいす、父のお手製の玄関のスロープなどがある。すべて曽祖母が歩きやすかったり、暮らしやすくする為の道具だ。私たちから見れば、何てことない段差でも、足が不自由な人にとってはとても不便で危険だ。倒れてしまうと、ひとりでは起き上がれないのだから。

今は介護保険などを使って、色々なサービスを受けられ、スロープや手すり等を補助してもらえるそうだ。とても有り難い制度だ。

町を歩いていても、そこら中に段差や障害物がある。徐々に改善されて、障害者も暮らしやすくなってきていると思うけれど、自分が不自由になった時、本当に暮らしやすいのだろうか。健常者が意見を出したり、改善策を決めるのではなく、障害者の意見や実際に行動を共にしたりして意見を出し合うのがいいと思う。案外こんなところが不便なんだなあと、再確認できたりするのではないかと思う。

そんな曽祖母も今は私たちの名前と顔が分からない。今、名前と顔が分かるのは祖母だけになってしまった。自分の子供である祖父、一番大好きだった孫である私の父の顔も忘れてしまった。認知症になってしまったのだ。歩く生き字引と言われた曽祖母には、

一番似合わない病気になってしまったのだ。
認知症には、「アルツハイマー型」「レビー小体型」「血管性認知症」「前頭側頭型」という種類がある。それぞれ色々な症状があり、最も多いのがアルツハイマー型だそうだ。曽祖母も急に私たちを忘れてしまったのではない。今の事を忘れてしまっていても、昔の事はすごくよく覚えている。
例えば、自分の実家の話をしたり、うちではなく、実家へ帰りたいと言ったりする。友達のおばあさんも同じように実家へ帰りたいと荷物を用意したりしたそうだ。
認知症はとても身近な病気だ。私も年をとったらなるかもしれない。いつまでも元気に長生きしたいと健康に気をつけていても、なってしまうかもしれない。自分の事や家族を忘れてしまうのだから、自分がなったらと思うととても不安だ。
でも、こうして曽祖母の事を文字にしたり、認知症について調べたりして、認知症をもっと理解することで、みんなが暮らしやすい、不安のない生活を送ることができるのだと思う。
曽祖母は今年百歳を迎えみんなにお祝いをしてもらった。総理大臣、県知事、市長の賞状を市長さんから頂いた。
その日はとても機嫌が良く、とってもいい笑顔の写真が撮れた。やっぱり曽祖母には笑顔が似合う。その曽祖母を見て、祖父も祖母も笑顔だった。家族が笑顔でいることは、みんなを幸せにすると思う。もっともっと長生きして欲しい。
私たちの顔や名前を忘れてしまっていても、家族だという事は分かっているのだなと思う。